ハッキリ ハキ ハキ
指差し呼称
念押し！
メディカル めぢ子
©OKUTSU KOSUKE

ハッキリハキハキ念押し！指差し呼称

指差し呼称は、自分の行動を自分でチェックする、いわば一人Ｗチェック。ちゃんと行えばほぼ間違いは起こらない。しっかり頭を注意モードに切り替えて指差し呼称しよう。マンネリ化しないよう、時には左右の手や、振り下ろし方を変えたり。工夫しながらいつも確実に念押し確認とするのだ。

甲陽軍鑑に学ぶ安全①

信玄公の念押し確認

一五七二（元亀３）年、武田信玄公は徳川家康公と遠江国三方ヶ原で戦い、織田信長公の援軍もろとも散々に打ち破った。この戦いの前、信玄公は、家康公が若いながらも東海道随一といわれる程の武将であり、かつ、遠方にさらなる敵援軍が控えているため、もし勝っても次の戦いで負けてしまうと考え、決戦を避けようとしていた。ところが、偵察の報告によると徳川・織田連合軍の軍勢は少なく、戦えば勝てそうだということであった。それでも信玄公は、偵察上手の者にもう一度偵察させて前の偵察が正しいことを念押し確認した上で、慎重に戦闘を開始している。

この戦いに限らず、信玄公は念押し確認を徹底している。（第４次）川中島の戦いでは、目の前に現れた上杉謙信（当時の名は上杉政虎）公の部隊の動きを撤退だと報告する部下に対し、どのように動いたのかを改めて聞き出し、それが撤退ではなく「車がかり」という攻撃の陣構えであることを察知し、自軍を整えた。また相模国三増峠の戦いでは、敵である北条方の者を複数生け捕りにして情報を聞き出し、北条軍が三増峠で待ち構えていることを入念に確認し、準備を整えている。

このような信玄公だからこそ、その統治時代、甲斐本国への他国軍の侵入を一切許さなかった。

＊出典：品32、35、39

©OKUTSU KOSUKE

確実

①親指：正しい投与時間
（親は時間にうるさい）

②人差し指：正しい患者
（人は合っていますか？）

③中指：正しい方法
（体の中に入れる方法は合っていますか？）

④薬指：正しい薬剤
（薬剤は合っていますか？）

⑤子指：正しい用量
（子供は量が重要です）

⑥手掌：正しい目的
（使用目的の根拠を把握）

6R

メディカルめぢ子

©OKUTSU KOSUKE

確実 6R

与薬の際の確認項目は大きく分けてしまえば6個しかない。それだけで良いのだ。ただし、様々な薬や病態があり、看護業務自体も複雑であるから機械的作業で片づけられないのも事実。残念ながら頭を働かせていちいち考えて、形ばかりの確認にならないよう努めなければならない。全体の流れの中で確実に行えるように、達人目指して腕を磨こう。

甲陽軍鑑に学ぶ安全②

武田信繁家訓

武士の心得

信玄公の弟君信繁公は、父信虎公が後継者としようとしたほどの人物である。信虎公は甲斐国を統一した猛将であったが、非道の国主に成り果てて家臣・領民の信頼を失い、信玄公に追放されたが、信繁公は生涯兄に忠義を尽くした。その信繁公は子信豊に99箇条からなる教訓を与えた。そこには武士としての心得が細かく書かれている。戦場においては全力を出すこと、油断なく行儀を心がけること、武勇を心がけること、嘘を言わないこと、愚痴を言わないこと、学問をぬからないこと、歌道に精通すること、礼儀正しくあること、風流に過ぎないこと、いつでも堪忍の二文字を心がけること、武具は怠りなく準備しておくこと、等々。

戦場で全力を出すために日々鍛錬する。常に行儀よく、礼儀正しくあるために、人が見ていないところでも心がける。つい嘘や愚痴を言わない。学問や歌も、形だけ学ぶのではなく、実践で使えるよう、秀歌を詠めるよう努力を積み重ねる。簡単といえば簡単、難しいといえば難しい、このような一つ一つを自然にこなせるのが真の武士である。

守るべき項目を決め、実践を積み重ねる。職種問わずこれが極めていくということだ。

＊出典：品2、3、19

©OKUTSU KOSUKE

的確
残す
記録
メディカルめぢ子
©OKUTSU KOSUKE

的確・残す記録

記録をつけるのは面倒。だが、記録は患者や治療に関わるみんなのもの。必要なことを書かなかったり、いい加減に書くことがないように。また、ちゃんとした記録なら、何かあった際、自分自身を守ってくれる。ペンは剣よりも強し、裁判だろうが何だろうが強力な武器・防具になるのである。的確にスマートにすらすら書けるようにがんばれ！

甲陽軍鑑に学ぶ安全③

現代に伝わる武田家の事実

甲陽軍鑑

春日虎綱（高坂昌信）は元農民で、裁判で父の遺産を失ったところを信玄公に取り立てられ、以降、その恩に報いる活躍を続けて重臣となった。甲陽軍鑑は、その春日の口伝を中核とする書物である。甲斐一国からはじまり、信濃、駿河を制圧し、遠江、三河、上野、美濃、飛騨、越中にも領域を拡大し、そして滅んだ武田家の歴史が記載されている。もちろん真実とずれた記載もあろうが、武田家や春日家の滅亡を経てこれだけの記録が残っているのは奇跡である。

的確な記録であれば何百年たっても当時の記憶は残る。記録は強靭な生命力を持つ。今書いている医療記録はその患者の人生の一部であり、書く人自身の行ったことの証拠でもある。だが、数時間後、数日後に事実が残らなくなれば、もうその時点で歴史から姿を消してしまう。

信玄公は死の6年前、「膈」（胃癌か？）と診断され、先が長くないと悟っていた。三方ヶ原の戦いの少し後、一旦甲府に戻り療養して戦線復帰したが、戦地で倒れた。口に腫物ができ、歯が5、6本抜け、死脈を打つ状態となった。そしてそこにいる一門・家臣すべてを集め遺言し、最期を迎えた。信玄公の医療記録は400数十年後の今に厳然と残っている。

＊出典：起巻第一、品39、末書下巻初

©OKUTSU KOSUKE